日本史史料英訳ワークショップ「金沢文庫文書の回」

2020 年 12 月 5 日、「金沢文庫文書」をテーマとする日本史史料英訳ワークショップ（歴史家ワークショップ・東京大学経済学研究科主催）がオンラインで開催された。

日本中世の社会経済史専門のポーラ・カーティス氏（カリフォルニア大学ロサンゼルス校、当時イエール大学）をお招きし、黄霄龍氏（東京大学）による進行のもと、貫井裕恵、三輪眞嗣、梅沢恵（神奈川県立金沢文庫）が報告をおこなった。また、ヨーロッパ中世史専門の赤江雄一氏（慶応義塾大学）から、「紙背文書」「僧侶」の英訳についてヨーロッパ中世の状況と比較しながらコメントをいただいた。

当日は、まず貫井が「金沢文庫文書」の概要と特徴について、史料①②の文書を例示して説明した後、ポーラ・カーティス氏が海外における「金沢文庫文書」の研究状況を説明した。次いで、三輪が史料③④文書の紹介と英訳案の提示をおこない、梅沢が「唐物」についてのコメントを述べた。その後、各史料の解釈や背景についての討論がおこなわれた。次に、ポーラ・カーティス氏が史料③④の英訳案を発表し、赤江氏が紙背文書と僧侶の訳語についてコメントを述べた。最後におこなわれた全体討論では、それぞれの史料で用いられた訳語について、様々な質問や意見が寄せられた。

以下、（一）金沢文庫文書の概要と、（二）当日検討された史料①～④の書き下し文、現代語訳および英訳を紹介する。また、（三）当日おこなわれた討論のうち、特に議論が集中した「唐物」「僧侶」「紙背文書」の訳語や関連する部分について、その概要を紹介する。

なお、（一）（二）は貫井、三輪の当日の報告レジュメをもとに、若干の訂正を加えて再構成したもの、（三）は討論（記録は池田真歩氏（北海学園大学））をもとに、登壇者および黄氏による検討を経てまとめたものである。また、すべての英訳はポーラ・カーティス氏によるものである。

（一）国宝 金沢文庫文書について

神奈川県立金沢文庫は、鎌倉時代の政治・宗教・文化を伝える、称名寺ゆかりの文化財をいまに伝えている。その歴史は、鎌倉時代中期（13 世紀後半）に、鎌倉幕府の執権北条氏の一族である北条実時（1224～1276）が、金沢文庫と呼ばれる文庫（private library, collection）を創設したことにはじまる。

称名寺ゆかりの文化財のうちに、国宝「金沢文庫文書」がある。「金沢文庫文書」は、北条実時をはじめとする金沢北条氏の菩提寺である称名寺に伝わった文書群で、鎌倉時代後期の文書を中心に、4149 通の文書が含まれる。金沢北条氏やその一族、称名寺の僧侶たちの書状、称名寺領の経営に関わる文書、称名寺の僧侶の師資相承に関わる文書などがあり、鎌倉時代の歴史を語る豊富な内容を有している。

金沢文庫は、鎌倉時代後期（14 世紀前期）、実時の孫・金沢貞顕（1278～1333）の時代にその最盛期を迎えるが、金沢北条氏の滅亡とともに文庫は称名寺の管理にゆだねられ、以降蔵書は次第に散逸していき、文書も近世にはほとんどその存在が知られていなかった。

昭和の初頭（20 世紀前～中期）になって、金沢文庫や東京大学史料編纂所の研究者により、金沢文庫文書の整理が進められた。この整理は、称名寺の僧侶らの聖教書写に用いられたために伝来した聖教の裏側にみえる文書を、もとの状態に戻す形で行われた。このため、「金沢文庫文書」の大半は、紙背文書として伝来している。以下、「金沢文庫文書」にみられる、紙背文書と墨映文書と呼ばれる現象について紹介する。

本文書群の形態的特徴

●紙背文書

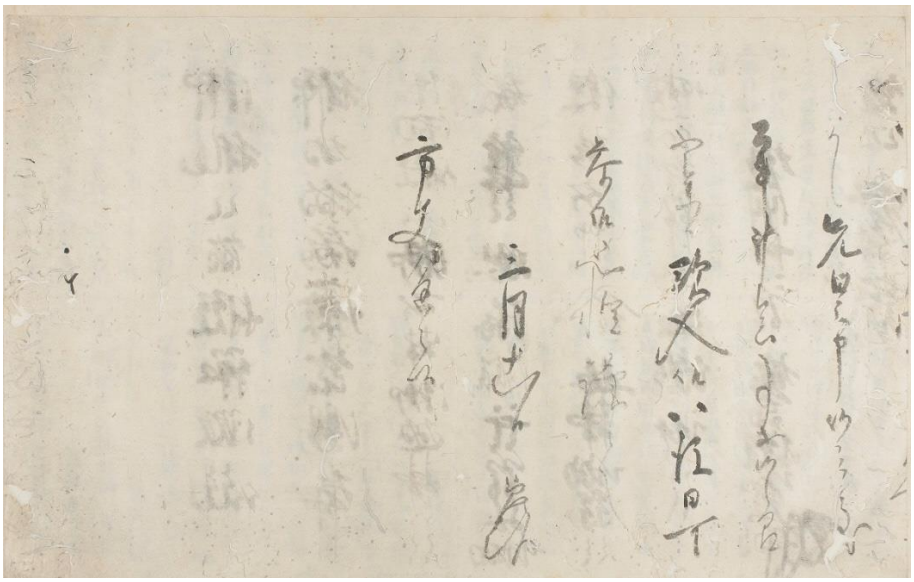
中世、紙は貴重であったため、しばしば再利用された。具体的には、手許に届いた手紙の裏側（白紙の面）を、書物（典籍や聖教）を書写・作成する際の料紙として使用した。「金沢文庫文書」の場合、大半は「称名寺聖教」（称名寺の僧侶たちの宗教的述作）の紙背文書として伝わっている。

●墨映文書

（史料①）と（史料②）は、ともに『宝寿抄』という聖教の紙背文書として伝わっている。また、これらは互いに文書の文字が映り合っている。これを墨映文書と呼ぶ。墨映文書とは、再利用する文書の墨書がある面同士を向い合せにし、重ねて湿らせてプレスして平滑にした際、墨が滲んで映り合い、裏文字で痕跡だけ残ったものである。墨映文書は、中世の紙の再利用の方法を伝えると同時に、原本が失われてしまった史料の文字情報をも、私たちに教えてくれるのである。

（二）各史料の翻刻、書き下し文、現代語訳

史料①　金沢貞顕書状 文保元年（1317）　（整理番号六〇一、『金沢文庫古文書』番号二八三）



【翻刻】

［　　］

よし、先日令申候之処、

公事計会事等候之間、

不参候、歎入候、以後日可

参候、恐惶謹言、

（文保元年）三月十八日　貞顕（金沢）

方丈（釼阿）進之候

（切封墨引）

【読み下し】

（前欠）よし、先日申さしめ候のところ、公事計会（くうじけいかい）の事等候の間、参らず候。歎き入り候。後日をもって、参るべく候。恐惶謹言（きょうこうきんげん）。

三月十八日　　貞顕（さだあき）

方丈（ほうじょう）これを進（まい）らせ候

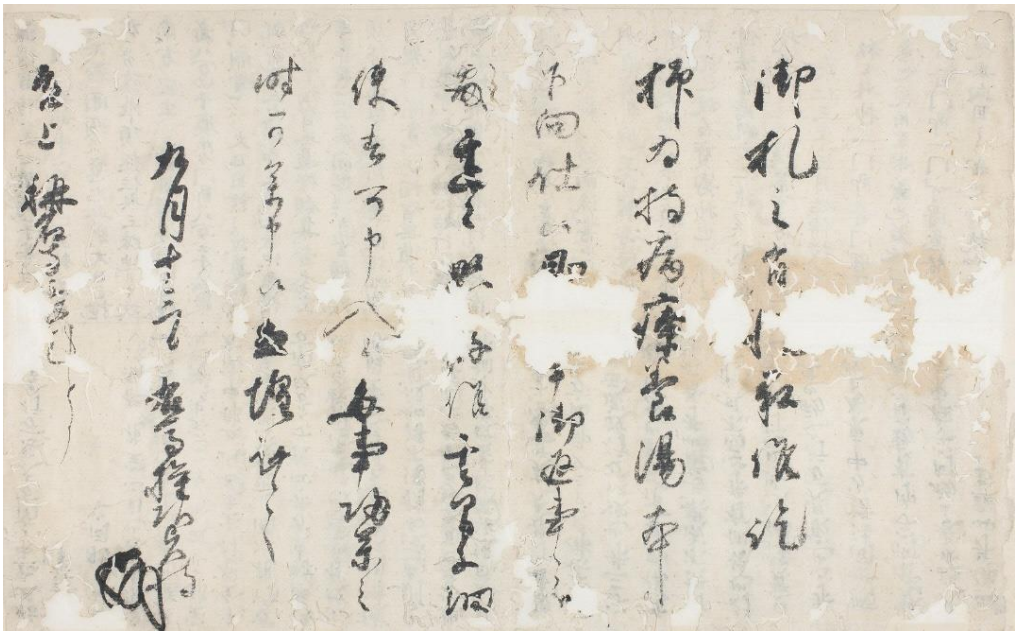
【現代語訳】

（前欠）の由を、先日申しましたところ、公務で忙しかったこともあり、（あなた〈称名寺釼阿〉の許に）参上できませんでした。残念なことです。後日に参ります。恐惶謹言。

（文保元年）三月十八日　　（金沢）貞顕

方丈（釼阿）に進上します。

史料②　金沢貞将書状　鎌倉時代　（整理番号七七七、『金沢文庫古文書』番号五〇六）



【翻刻】

御札之旨、悦承候訖、
抑、為持病療養、湯本（相模国）
下向仕候、即〔可〕□申御返事之
処、遅々恐存候、其間子細
使者可申入候、毎事帰参之
時、可参申候、恐惶謹言、
　九月十三日　右馬権頭貞将（金沢）（花押）
進上　称名寺長老（剱阿）〈御返事〉

【読み下し】

御札の旨、悦び承り候いおわんぬ。
そもそも、持病療養のため、湯本に下向つかまつり候、すなわち御返事を申す（べきの）ところ、遅々恐れ存じ候。その間の子細使者申し入るべく候。毎事帰参の時、参り申すべく候。恐惶謹言。
　九月十三日　右馬権頭貞将　（花押）
進上　称名寺長老御返事

【現代語訳】

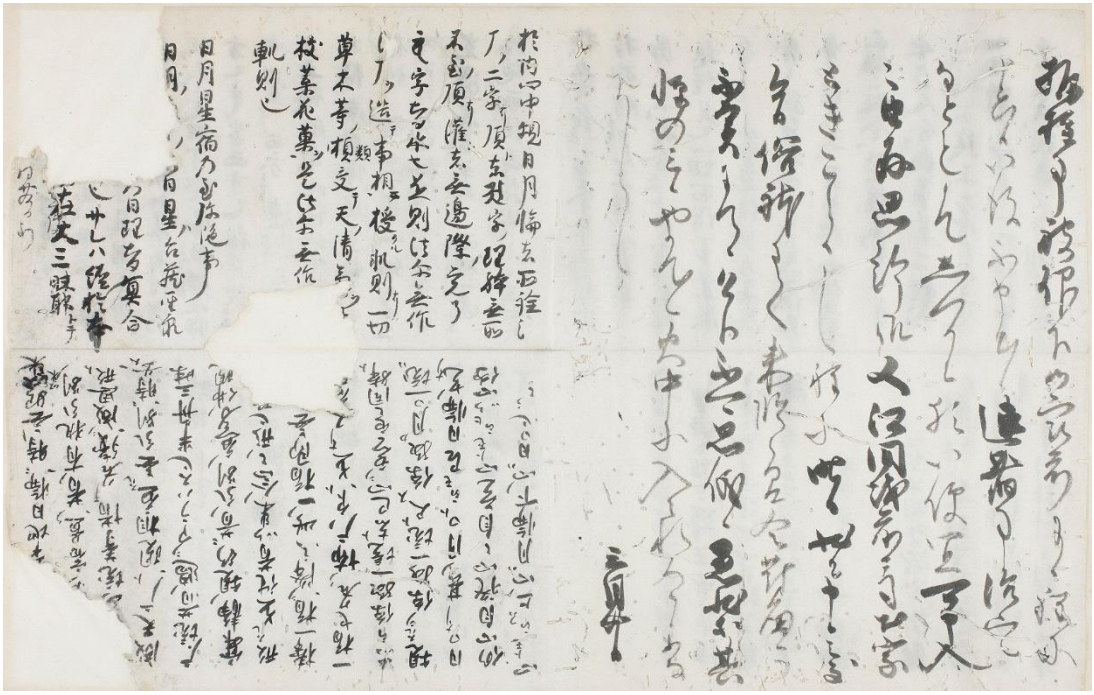
（あなた〈称名寺剱阿〉からの）お手紙を喜ばしく拝読いたしました。

さて、（私〈金沢貞将〉は）持病の療養のために、湯本（箱根）に下向しました。すぐに（あなた〈釼阿〉へ）お返事を差し上げようとしたところ、（叶わず）遅くなってしまい恐れ入ります。その間の詳細は（この手紙を届ける）使者が申し上げます。（私、貞将が鎌倉に）帰りましたときに、（あなた〈釼阿〉の許へ）参ります。恐惶謹言。

九月十三日　（金沢）右馬権頭貞将（花押）

進上　称名寺長老（釼阿）への御返事

史料③　金沢貞顕書状（整理番号六七二、『金沢文庫古文書』番号三七五）



【翻刻】

執権事被仰下候、最前に候程に

十六日以後不申出候、連署事治定

なとも候て、しつかニ、猶以便宜可申入

之由、存思給候、又江間越前々司出家

ときこえ候し程に、昨日状〈ニ〉申候之処、

今日俗体にて来臨之間、令対面候了、

不実にて候けり、不可思儀候、愚状等其

憚のミ候、やかてゝゝゝ火中に入られ候へく候、あな

かしく、

（正中三年）三月廿日

「□同廿九日到」

【読み下し】

執権の事仰せ下され候、最前に候程に、十六日以後申し出ださず候、連署の事治定なども候いて、しずかに猶便宜を以て申し入るべきの由、存じ思し給い候、又、江間越前前司（時見）出家ときこえ候し程に、昨日の状に申し候の処、今日俗体にて来臨の間、対面せしめ候い了んぬ。不実にて候けり。思儀すべからず候。愚状等其の憚りのみ候。やがてやがて火中に入れられ候べく候。あなかしく。

（正中三年）三月二十日

「□同廿九日到る」

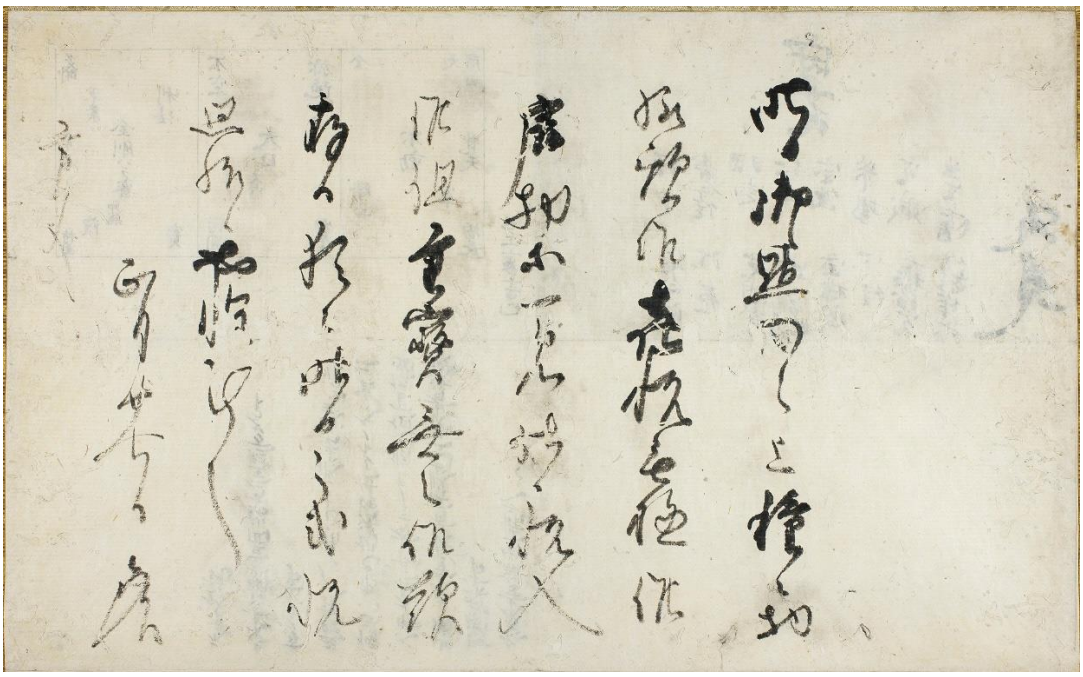
【現代語訳】

執権の事を（私貞顕に）仰せ下されました。真っ先にお知らせすべきところ、十六日以降ご連絡差し上げておりません。連署の事が決定して、落ち着いて手紙をもって申し入れたく存じます。また、江間越前前司が出家したと聞いていましたので、昨日の手紙で申し上げましたところ、（江間が）今日俗体でお出でになったので、対面しました。（江間が出家したという噂は）事実ではありませんでした。不思議なことです。私の手紙は憚りがありますので、すぐにでも火中に投じてください。かしこ。

（正中三年）三月二十日

「同（三月）二十九日に到来した。」

史料④　金沢貞顕書状（整理番号五九七、『金沢文庫古文書』番号二七九）



【翻刻】

昨日御点心之上、種々物
給預候、喜悦無極候、
唐物等一見仕候、悦入
候、但重宝無之候、歎
存候、猶々昨日之式、悦
思給候、恐惶謹言、

正月廿七日　　貞顕（金沢）

方丈（釼阿）

【読み下し】

昨日御点心の上、種々の物給わり預かり候、喜悦極まりなく候、唐物等一見仕り候、悦び入り候、但し重宝之なく候、歎き存じ候、猶々昨日の式、悦び思し給い候、恐惶謹言、

正月廿七日　　貞顕（花押）

方丈

【現代語訳】

昨日は点心をいただいた上、種々の物をいただき預かりました。喜ばしいことこの上ありません。唐物などを拝見いたしました。うれしく思います。ただし珍しいものはありませんでした。残念に思っております。なお、昨日のことは喜ばしく思っております。恐れながら謹んで申し上げます。

正月二十七日　　（金沢）貞顕（花押）

方丈（釼阿）へ

（三）討論の一部概要

・「唐物」について

「唐物」については、「唐」にどのようなイメージを読みとるかという点で意見が分かれた。中世に入ってくる新たなもの、exotica のようなニュアンスがあるように感じるという意見が出された。一方で、ポーラ・カーティス氏が提示した Foreign goods の指す範囲が広く、貴重なものというニュアンスが見えなくなるという意見が出され、"Exotic objects" “foreign novelty”などの案が提示された。ただし foreign に貴重な、高価なものという意味を読みとるかは読者によるという指摘もあった。この他、中国製品に限らない場合は、「goods imported from the continent」または「foreign goods imported from the continent」などはどうかという意見も出された。

・「僧侶」「出家」について

赤江コメントでは、priests が西洋史の文脈では在俗聖職者で俗人の面倒を見るという性格を持つのに対し、monks が修道士、戒律にもとづき特定の空間に住むという特徴が説明され、両者には身分的な違いがあり、身分の行き来は少ないとした。これに関連して、monk が日本の僧の訳語として広がった一つの原因に禅の影響が議論の中で指摘された。その上で、西洋 の monks/priests に対して、日本の「僧」は流動的な存在である。英語で表現する場合は、monks/priests を混ぜずにどちらかに統一した方が西洋史研究者の混乱を生まない（日本の僧の存在形態は monk と priest の中間的形態である secular canon に近いかもしれない）とのコメントがあった。

次に議論は、在俗者の出家、つまり原則的には沙弥になること、剃髪はするが服装は正式な僧侶とは違うという中間的な段階をどう訳すかという点に及んだ。「出家」をどのように訳すのかという点について、take the tonsure が英語圏における set phrase として使われている他、意訳ではあるが、shave his head は、出家=剃髪ならよいのではないかという提案があった。

「沙弥」は novice と英訳されるが、西洋史の文脈では novice は、正式な修道誓願（profession）を行い monk になる前の存在（「練修士」）である。したがって、西洋的文脈では novice というと monk になるという方向が示されてしまう。議論のなかでは、「沙弥」は、monk に「なる」という結果を思い起こさせる novice という訳よりも、「世俗を去る」というニュアンスを重視して訳したほうがよいのではないか。その場合「剃髪する」という上記の表現が適当かもしれないという議論があった。また、「沙弥」は「僧職ではないが世俗を去っている」中間的存在として lay religious という概念で表すことができるという提案もあった。

紙背文書について

「金沢文庫文書」の特徴の一つである「紙背文書」の訳語についても、赤江氏のコメントを起点とした議論がおこなわれた。「紙背文書」の訳として reverse-side documents が挙げられる。他に palimpsest という語があるが、拡張的使用には若干ためらいがあるという意見が出された。

資料の表・裏を示す英単語として recto と verso があるが、和本の冊子本の場合は使用できるのかという疑問が提示された。また、冊子体の史料については、西洋の冊子と日本の冊子では recto と verso が右左逆になるため、その点を注記したうえでなら使用してもよいのではないかという意見が出された。